

## 念仏講の“二つの輪”

— ある参与観察者の視角 —

古家 晴美

はじめに

この小論をまとめるに至った発端は、筆者が千葉県袖ヶ浦町で参与観察した<sup>1)</sup>ハアトリ（念仏初め）の会食の席で、偶然その場に居合わせることで生じたひとつの出来事にある。本稿では、筆者の参加により、普段の念仏講の会食とは異なった状況から引き出された問題を糸口に、寺の合併と念仏講の変遷、三種の念仏講の相互関係について考えていきたい。

その偶然の出来事とは、ハアトリの会食で作られる“二つの輪”との出会いである。話者Aさんに連れられ、ハアトリの行われている寺を訪れた筆者は、参加者全員が念仏を唱えた後の会食にも加わらせてもらった。Aさんは「年寄りの多い所の方が話を聞くのに都合が良かろう」と言い、筆者を年輩者の間に座らせ、筆者のための食べ物も置いて、少し離れた所に席をとった。

ところが、Aさんが筆者のために用意してくれた食物は両隣に座る老婆たちが食べている料理とは異なっており、Aさんは、時折こちらの様子を伺うようにちらちらと筆者の前に置かれた皿を遠くから覗くのであった。そのまなざしは、何かを訴えかけているように感じられた。というのも、筆者の前には、Aさんから貰った食べ物以外に、両隣の老婆達から出された料理も並んでいたのである。そこで、あたりを見回すと、老婆たちと異なった料理を食べているのは、筆者だけではなく、そこでは、全体が二つのグループに分かれ両者は全く異なったものを食べていたのである。

筆者の立場は微妙なものであった。仮にAさんの属す輪を“第1の輪”、老婆達の輪を“第2の輪”とすると、筆者は、“第1の輪”の人に連れられてきたことでは“第1の輪”の客であるのに“第2の輪”の中に席を占めることでその輪の人達からも料理を勧められ、その客ともなっていたからである。“第2の輪”の人達の再三の勧めにも拘わらず、筆者はAさんの視線を感じ、料理に箸をつけずに、専ら老婆達の話に耳を傾けていた。そうこうするうちに、Aさんが立ち上がり、筆者に「いただきなさいな」と声をかけたのである。そこで、筆者は料理に箸をつけると、それまで相互に食物の交換が

全く見られず、みごとなまでに保たれていた二つの輪の閉鎖性・排他性が一時的に崩れたのであった。“第2の輪”のある老婆は自宅まで戻り、取ってきた寿司を“第1の輪”の成員に分けることさえした。一方“第1の輪”の方でもお返しに“第2の輪”の方へ料理を分けたのである。

これらの方たちには、余計な気を使わせて申し訳ないと思う反面この二つの輪は一体何を意味するものなのであろうか、という点に興味を持ったのが、そもそもの始まりなのであった。

冒頭で、敢えてこれだけのスペースをさいて、本稿の研究の動機を記したのは、この“二つの輪”が合寺の過程で生み出されたものであり、調査者がその場に列席していなければ、恐らく気付くことはないほど、あるいは、村人にとっては語るに足らぬほどささいなできごとであったに違いないからである。<sup>2)</sup> しかし、合寺の過程と念仏講の変遷を考えるに際し、この“二つの輪”は重要な意味を持つ。筆者は、これらの問題を提示すると同時に、聞き取り調査では得難い、被調査者に意識されていないできごとを追う参与観察の重要性についても注目したい。

## 1. 問題の所在

はじめにハアトリを例にあげた“二つの輪”をともなう念仏講の会食は、他に念仏初めのハアトリに対応する念仏納めのハアカケ、および春と秋の彼岸にも行われる。このほかに念仏は毎月二回行われる月並み念仏と葬式念仏があるが、そこでは“二つの輪”は出現しない。

「念仏講が希薄化した際にも最後に残るのは、月並み念仏と葬式時の念仏」<sup>3)</sup>だが、ここではもうひとつ研究対象の枠を広げ、月並み念仏と葬式念仏に、ハアトリ・ハアカケ・彼岸の特別な機会に行う念仏講（以下これらを特別行事と総称する）を加え、それら三者の関連を検討したい。

これまでの念仏講研究を振り返ると、民俗念仏は、正統派仏教と仏教以前からの日本在来の呪術的民間信仰との接点に位置するとされ、夙に多くの研究者の興味を惹いてきた。

竹田聰洲氏〔竹田1984:31〕は念仏講がその成立時から檀那寺の拘束をあまり受けず、前仏教的な古来の死霊鎮和の呪術的信仰に根差し、民衆ベースで流布してきたと述べている。

また、五来重氏〔五来 1975:53-57〕も民俗念仏を(1)鎮魂呪術的

念仏(2) 農耕儀礼的念仏(3) 民俗芸能的念仏に三分類し、その呪術的性質に注目して、先祖供養や葬式・忌日などの際に行う(1)が最も根源的なもので広く分布していると論じている。

一方、堀一郎氏〔堀 1971: 195〕は奈良時代末期にまで遡り、その後の日本浄土教の流れが、天台のオーソドックスな止観・観念の念仏とこれらの民間の呪術的念仏の二つに分岐したと述べている。

三氏の研究に共通していえることは、元来、念仏が大乗仏教の經典に記されていた教えに基づいているにも拘わらず、教義・宗派・教団による規制の枠外においても多様な民俗的形態をとり伝承されてきたという点である。そこでは特に、教義を重視する正統派教義の念仏と呪術的要素を持つ民俗念仏が対照的に描かれている点が注目される。

このような研究の流れの中で坂本要氏〔坂本 1984〕は、民俗仏教の呪術的性格に注目し、利根川流域を中心に葬式念仏の和讃を分析することにより、葬式における僧と老婆達との役割分担について論じている。つまり、僧の葬式では、念仏を唱え死後極楽で往生することを願い、もうひとつの葬式である念仏講では、老婆たちが地獄系の和讃を唱えることにより、僧の触れ得なかつた自らの罪を説きあかし、呪術的な性格を持つ鎮魂滅罪を果たそうとすると言うのである。即ち、死後、往生するには、いったん冥界である地獄の入り口に立ち寄り滅罪する必要があることから、念仏講による葬式も不可欠のものであり、二つの葬式は相互補完的關係にある。

近世以降の葬式への寺の介入、あるいは近年見られる念仏を唱える者の減少など、その時々により念仏講を取り巻く状況は変化しているが、本稿では、戦後二度にわたる合寺の過程と念仏講の変遷との關係を追うことで、三種の念仏講がそれぞれ異なつた集団として独自の変遷を経てきた点を明らかにしたい。そしてこれまでの諸研究を踏まえたいうでそれらの呪術的性格について検討しようと思う。

以上のように、本稿の目的は月並み念仏・特別行事の念仏・葬式念仏の三種の民俗念仏を集団構成の面から区別し、それらの間に生じる相互作用・關係を明らかにすることにある。

## 2. 調査地概況

千葉県袖ヶ浦町は内房中部の木更津市の北東に接し、近年、東京のベッドタウンとして宅地化が急速に進んでいる。調査地、神納(かんのう)は現在、袖ヶ浦町北西部の昭和地区に含まれる。行政上

は昭和7年に神納村が奈良輪村と合併し昭和町となり、昭和30年に昭和町、長浦町、根形村が合併し、袖ヶ浦町となった。神納は人口3071（男1551、女1520）の水稻栽培を中心とした農村である。<sup>4)</sup>

神納は1区と2区の2つの区に分かれ、1区はかつての新田、2区は本村に相当する。さらに、2区は1分区（新興住宅地）、2分区、3分区、東京ガス、旭化成（後二者は社宅）に分かれる。念仏講に参加するのは、神納の旧住民を中心とした2区の2分区と3分区の年輩の女性である。2分区には西、中辻子（なかずし）、中辻子台、3分区には谷（やつ）、向坂（むけざか）、大野台、仁田島（にたじま）の小字が含まれる。現在、月並み念仏の会場となっている神応寺（じんおうじ）は3分区の谷にある。ここで主に取り上げるのは下図に◎印をつけた2区の2分区と3分区である。<sup>5)</sup>

神納	1区	新田		
	2区	本村		
			1分区	新興住宅地
			◎ 2分区	西、中辻子、中辻子台
			◎ 3分区	谷、向坂、大野台、仁田島
				東京ガス
				旭化成

### 3. 三種の念仏講

神納の念仏講は上述のように、A 葬式念仏 B 月並み念仏 C 特別行事に大別される。ここではまず初めにそれらの念仏講の実態を把握しておきたい。

#### A. 葬式念仏

坂本氏<sup>6)</sup>はその論考をすすめる際に「民間念仏講の調査を続けているうちに念仏講の本務が葬送にあつたとする所が多いのに気付きたため、葬送儀礼の中で念仏講の役割を考えようとするものである」と述べ、フィールド調査をふまえて葬式念仏の重要性を強調している。竹田氏<sup>7)</sup>によりこれを歴史的にみれば、念仏講が仏教系諸講の中で最も広く流布した大きな理由の1つは、村落内部の葬送・追善に関与したことにある。近世の寺檀制の確立以前に葬祭に当たったのは、民間在地に自生の念仏団体であり、近世以降もこれが素

地となり葬式を行ったため、寺の介入は限定されたものであった。また、堀氏<sup>8)</sup>は、本来は阿弥陀仏の名を唱えること、即ち、念仏は僧の精神統一法であったのが、民衆の間には、死者供養として広まったと述べている。

これらの研究では、葬式念仏を民俗念仏の原型を思わせるような重要な位置を占めるものとして位置付けている。

では、次に神納における念仏講について具体的にふれてみよう。西は、二つに分かれそれぞれが葬式組を構成している。同じ葬式組の所帯から男女一人ずつ出し、ツゲビト（告げ人）・ロクドー（穴掘り）・会計・僧侶の送迎・花輪を寺と墓へ持っていく・寺へシジュークノモチ（四十九の餅）を届けるなどの手伝いをする。通夜にはゴゼンサン（僧侶）が来て読経する。翌日、野辺送りに際し、念仏講に通う西のおばあさんたちはゴゼンサンの前に立ち、死者の家の宗旨に合わせ、鉦もしくは太鼓を叩いて歩く。そして、墓地から戻ると、近親者とゴゼンサンは本膳を囲む。近親者とゴゼンサンが食事を済ませて帰ると、次に葬式組の者たちが食事をする。その後、西全体の各戸から一人ずつ来て、念仏を唱える。ここで、ショナノカ（初七日）の法要も済ませてしまうのである。<sup>9)</sup> この念仏には、だいたい女性が来ることが多いが、普段から念仏講に参加していない者、あるいは手が足りない場合には、男が出席してもかまわない。念仏を唱えることよりも、全戸から出席することに意義がある。

谷でも葬式の際には、ワッカチョウナイ（上町内）・シタチョウナイ（下町内）に分かれる。上で葬式が出ると、野辺送りについていくのは、上の男と下の男女で、上の女は家に残り食事の支度をする。野辺送りの鉦は、男が叩く。西と同様に近親者の食事が終わると、谷の者が食事をするが、その後のショナノカの念仏は、念仏講のおばあさんに頼む。

向坂では、戸数が少ないこともあり（今は7戸だがもとは5戸）、組に分かれておらず、小字が一つの葬式組となっている。野辺送りの鉦や太鼓は、向坂町内の男が叩く。埋葬後、墓から戻り、親戚の者たちのための宴会が終わって帰ると、町内の者たちのための宴会となる。この宴会の前に、町内の男たちが念仏を唱える。女たちは宴会の後片付けに忙しいためだという。

仁田島は五年位前までは二つの組に分かれていたが、今では戸数が増えたため三つの組に分かれている。一つの組で葬式が出ると組内の各戸からは男女が一人ずつ手伝いに出、他の組からは男が一人ずつ出る。野辺送りで鉦をたたくのは、男の役目とされているが、

ショナノカで念仏を唱えるのは手伝いに来た組の女である。たとえ念仏を唱えられなくとも出席すればよい。

小字ごとに多少異なる所も見受けられるが、<sup>10)</sup>葬式を出すにあたり、野辺送りで鉦をたたくのは、同じ組の者、通夜の読経は僧が各々おこない、翌日、葬式後にショナノカの念仏を唱えるのは、組の者か、もしくは、同じ小字の者であるという点で共通している。

### B. 月並み念仏

毎月7日と21日には、2分区と3分区の60～80代の年輩の女性が神応寺に集まり、念仏を唱える。この時もハアトリ同様、念仏が終わると会食となるが、ハアトリのように二手に分かれて食べるということはない。ただし、毎回の会食の準備については2分区と3分区に分かれ、交替で行う。当番になった方の組では、一人200円ずつ集めた会費で、菓子や茶を準備するほかに、一人が1品ずつ手料理を持ち寄る。

### C. 特別行事の念仏講 — ハアトリ —

毎年、1月16日の念仏始め（ハアトリ）12月15日の念仏納め（ハアカケ）、春・秋の彼岸の計4回は月並み念仏同様に念仏の後で会食する。しかし、月並み念仏と異なり、特別行事では、念仏は参加者全員で唱えるが、会食になると、二手に分れ二つの輪を作ることは、すでに述べたとおりである。

神応寺には、現在、住職がいないため、隣に家があるAさんが鍵を保管し、必要な時に開けている。図1に示されているように、本尊が納められた部屋の隣に二つ並ぶ和室の境のふすまを取外し、そこで会食する。

筆者が参与観察した時の模様を、時間の経過に従って述べると、以下のようになる。

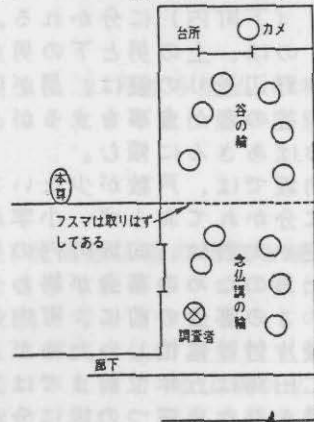


図1 ハアトリの2つの輪  
(『昭和地区の民俗』p57より)

- 12:55 参加者が三三五五、神応寺に集まり、長老格のNさんが「念仏でも始めようか。」と声をかける。  
 さい銭箱にさい銭を入れる者もいる。  
 前後二列に並ぶが、前列には年配者が四人座る。本尊に向かって左側の二人が太鼓を叩き、右側の二人がかねをたたく。あとの者は、後列に座る。  
 念仏が始まる。  
 最初の念仏は、ザンゲノモン  
 「ガシャク ショジョウ ショアクゴウ・・・イッサイガ コンカイ ザンゲ」  
 そして、次には三経  
 「ナムキーブツ ナムキーホウ ナムキーソウ・・・」  
 そのあとは、光明真言を十回唱える。  
 「トナエタテマツル コウミョウシンゴン オンナボキヤー ベーロシャノー マカボダラー マニハンロマ ジンバラ ハラハリタヤン」  
 それから、十三仏を唱える。  
 「ナムフドー シャカモンジュ・・・ミダアーシュク」
- 13:05 五番目は「ミダタノム ヒトハ アマヨノ ホシナレバクモハレネドモ・・・ナムアミダブツ」
- 13:12 そして、「ミワココニ ココロハ シナノノ ゼンコウジ ミチビキタマエ ミダノ ジョードヘ・・・」の和讃を六回繰り返す。
- 13:20 最後に「ハチジュッポー サンリブツ ミギイッサイノ ショボサツ ダイハチマン ショジョーカイセアミダシク」  
 4回、拍手を打つ。ここまでは集まった人々が一緒に行う。

部屋を替えて、二手に分れて会食、歓談。

二つの輪では、それぞれ異なったものを食べるが、詳しいことについては、後述する。

歓談の内容は、世間話やうわさ話など。輪の間で若干人の往来はあるが、たべものがやり取りされることはほとんどない。

16:00ころ

Nさんが「もう、おしまいにしましょうや。」と切り出す。

16:05 後片付け。

谷組（後述）が先に食器を洗い、棚に戻す。

念仏組（後述）はその後で洗うが、互に手伝うことはない。

食器洗いを待っている間に、ごちそうの余りものを取り分ける。

16:18 寺の戸締まりを済ませ、帰宅する。

ここで、三種の念仏講の現在の参加者について見ると、A. 葬式念仏の参加者はそれぞれの葬式組の所属と一致するのであるが、B. 月並み念仏と、C. ハアトリの参加者は、少々込入っている。月並み念仏に神応寺に通って来るのは、西、中辻子、中辻子台、谷、向坂、大野台、仁田島に住む60-80代の年配の女性であるが、ハアトリに来るのは、西、中辻子、中辻子台、谷の月並み念仏のメンバーとその地域の普段、念仏講に参加していない40代の若い人である。そして、1月16日に神応寺に来ない仁田島、向坂、大野台の者は、それぞれ独自にハアトリを行い、大野台と向坂では各々、マワリヤドで行っている。

では、次に神応寺のハアトリの二つの輪の意味するものを、仁田島、大野台、向坂のハアトリとの比較の中で探っていこう。

#### 4. 二つの輪

二つの輪について、参加者が食べているものとその調達方法をまとめると次のとおりである。

筆者を神応寺に連れてきてくれたAさんの属す“第1の輪”は、谷の住民六人で構成されている。そのうち毎月二回の念仏講に参加しているのは二人だけで、他の四人はそれよりも若く、ハアトリが特別な行事なので参加しているという。この輪の場合は谷の全戸から会費を徴収し、出席者たちがそれで材料を買い、当番が料理を作って持って来る。出来合いの惣菜や菓子が多い。全戸の出席が建前となっているが、会費だけ出し欠席する者が多い。これに対して、筆者が座った“第2の輪”は谷以外の西、中辻子、中辻子台の住民からなり “第1の輪”のような若手の参加者はなく、ほとんどが70歳過



ぎの年輩である。こちらの輪は、毎月の念仏講のメンバーばかりである。ごちそうも会費を徴収し当番が用意したものではなく、各自が一品ずつ持ち寄った手作りの料理（巻寿司、煮しめ、ほうれんそうのごまあえ、たくあんの干切り、煮豆など）である。

この二つの輪の間では、通常、輪を越えた食物のやり取りは、ない。<sup>11)</sup> 二つの輪の独立性・閉鎖性が明確であることは、会食時だけでなく料理の残り物の処分や食器類の後片付けにもうかがわれる。残り物はそれぞれの輪の中で取り分けられるが、輪の間での交換はなく、寺から借りた食器類を洗い片付ける時も、輪を越えて互いに手伝うということはない。

一方、仁田島では、谷と同様に仁田島の全戸<sup>12)</sup> から会費を徴収し、茶や菓子を準備して青年館で食べる。大野台と向坂では、当番の家でお茶とお茶受けのようなものを作って出した。

この特別行事（ハアトリ）と月並み念仏の居住地別の参加者と会場を整理してまとめると、以下の表のようになる

表 1 念仏講の会場

居住地	特別行事 (ハアトリ)	会場	月並み 念仏	会場
西 中辻子 中辻子台	2名 3 1	第1の輪	神応寺	2名 3 1
谷	6			
向坂	?		ヤド	1
大野台	?		ヤド	3
仁田島	?		青年館	3

(数字は神応寺で行う行事、講の参加者数)

1987年1月16日のハアトリに関しては、筆者は神応寺にいたので、向坂、仁田島、大野台の出席者が何人いたかについては確認することができなかつたが、この表から明らかのように、ハアトリの二つの輪とは神応寺に限って見た場合であつて、仁田島などの例を見ると、それが小字単位の集まりであることに気付くのである。つまり神応寺の二つの輪のうちの一つは、谷という小字の集まりとしてとらえることができる。では、神応寺の残りの一つの輪は何を意味するのであろうか。話者Aさんによればこの輪もかつては小字ごとに分かれていたという。

これを明らかにするため、神納における合寺の過程に沿って、葬式念仏、特別行事、月並み念仏の変遷を並行して把える必要がある。以下にまず合寺の実態を明らかにしてまとめることにしたい。

## 5. 合寺の過程と念仏講の変遷

戦前、神納には四つの寺があつた。真言宗智山派の西の光耀寺、谷の神蔵寺、仁田島の応善寺、そして浄土真宗で野畑にある法光寺である。本稿では、現在、月並み念仏などで神蔵寺と深い係わりを持つ前三者について検討してみたい。

光耀寺が神蔵寺に吸収合併されたのは昭和35年のことである。光耀寺は無住で荒れ果てていたため、本尊は形ばかりのものでみじめな姿となり、見るに忍びなかつたので神蔵寺へ運んだという。その後、戦争で家を焼け出された四所帯が、寺を仮の宿として本堂に住みついた。そして現在はそのうちの一軒に払い下げられ、個人の住宅となっている。

一方、昭和44年7月に神蔵寺と応善寺が対等の立場で合併し、神蔵寺という名称が双方から一字ずつを取つて、神応寺に改められた。本堂は旧神蔵寺側にあり、応善寺の建物が壊された跡地には青年館がたてられ、現在でも使われている。

神納における合寺と念仏講の係わり合いについて触れてみたい。合寺の過程の中で、三つの節目となる時期がある。戦前の三寺併存期を第Ⅰ期、戦争直後の神蔵寺・応善寺の併存期を第Ⅱ期、神応寺に統合された昭和44年以降を第Ⅲ期としよう。

	I 戦前	II 戦争直後	III 昭和44年
西	光耀寺	避難所	個人へ払い下げ
谷	神蔵寺		
仁田島	応善寺		青年館

図 2 合寺の過程

この時間の経過に従って、月並み念仏・特別行事・葬式念仏の変化をあとづけてみたい。

月並み念仏は、戦前は三つの寺で個別に行っていた。当時、西周辺に住む者は檀家でなくとも、近くの光耀寺へ毎月二回念仏に集まった。また、谷周辺の者は神蔵寺に、仁田島周辺の者は応善寺に集まった。それが戦後、光耀寺が神蔵寺に吸収されると、それまで光耀寺に集まっていた者が神蔵寺に通うようになったのである。そして応善寺が神蔵寺と合併し神応寺となると、応善寺に通っていた者は神応寺へ来るようになった。つまり月並み念仏の集まりは常に合寺の過程と対応して変化し、寺の数だけ月並み念仏のグループがあり、寺が一つに統合された現在では、神応寺の月並み念仏の集まり一つだけになっている。

これに対してハアトリなどの特別行事は、合寺の過程とは部分的に対応するのみである。神応寺のハアトリの輪は、現在は二つだけだが、それ以前は、西、谷、中辻子<sup>13)</sup>がそれぞれ小字ごとに輪を作っていたのである。さらに遡れば戦前は西の者は神蔵寺へは来ず、西にあった光耀寺へ念仏講や特別行事などに通い、そこでハアトリ

をしていた。一方、大野台と向坂はマワリヤドで行い、仁田島は第Ⅰ期と第Ⅱ期は応善寺で第Ⅲ期はその後に建てられた青年館で行った。即ち、寺の合併の影響でハアトリの会場を変更した小字もあるが、基本的には、特別行事は小字単位で行い、小字の集まりとしての性格が強かったと言えよう。

つまり、寺の合併に伴い月並み念仏は統合されたが、ハアトリはいまだに合寺以前と同様に、小字単位でそれぞれ独自に行っているのである。そして、葬式念仏は、寺の合併の影響はなんら受けず、檀那寺や宗旨とは無関係に小字ごとにおこなう。これは次のようにまとめられる。

表 2 合寺の過程と念仏講の変遷

	月並み念仏	特別行事	葬式念仏
第Ⅰ期	光耀寺 神蔵寺 応善寺	光耀寺・・・西 神蔵寺・・・谷、中辻子 応善寺・・・仁田島 ヤド・・・その他	小字ごと
第Ⅱ期	神蔵寺 応善寺	神蔵寺・応善寺 (小字ごとの輪) ヤド	
第Ⅲ期	神応寺	神応寺・青年館 (二つの輪)・ヤド	

以上、述べてきたことから明らかなのは

- 1 月並み念仏は、寺の合併と対応しつつ、推移してきた。

- 2 特別行事は、部分的に寺の合併に対応しつつも、基本的には、小字単位の集まりとして行われてきた。
- 3 葬式念仏は、寺の合併の影響を受けることなく、小字単位で行われてきた。

という点である。

さらに、これまでの念仏講研究史上、しばしば取り上げられてきた民俗念仏の呪術的性格というものを考えた場合、神納の念仏講の変遷においては、月並み念仏・特別行事・葬式念仏の順で寺との関係が深く、呪術的性格は、弱から強へと推移すると筆者は考える。これらについては、次項でまとめることにしたい。

## 結び

本稿では、ハアカケの会食時に見られる“二つの輪”の問題から出発し、そこに隠されている小字単位の集団構成をまず初めに明らかにした。そして、合寺の過程に伴う念仏講の変遷から、月並み念仏・特別行事・葬式念仏はそれぞれに異なる集団構成に基づいていることが示し得たと思う。

月並み念仏では、寺を単位として集団が構成されている。寺の合併は、月並み念仏の部落単位での統合という形で大きな影響を及ぼした。一方、特別行事に関しては寺の合併に部分的に影響を受けつつも、基本的には、小字が集団を構成する際の母体となっている。ハアトリについて言えば、寺が一つに統合された現在でも、寺を借りて集まっているにも拘わらず、小字で独立した輪を作る谷、そして相変わらずマワリヤドで行う向坂や大野台、青年館で行う仁田島の例があげられよう。また、今では一つの輪に寄せ集まっている西や中辻子についても、以前は独立した輪を形成していたという資料が得られた。これに対して、葬式念仏においては寺の合併の影響は殆どといってよいほど見られない。葬式念仏は基本的には寺の枠外の出来事のような扱われ方をしている。そこでは小字が大きな役割を果たしている。以上のように筆者は月並み念仏に寺単位、特別行事には寺を借りた小字単位、葬式念仏には小字単位の三種の念仏講の集団構成を示してみた。

これまでの念仏講研究において民俗念仏、特に葬式念仏の呪術的



本稿では、合寺に伴う念仏講の変遷を追うことにより、念仏講の重層性多元性を明らかにしようとしたが、筆者はこの図式を普遍的モデルとして提示したのではないことを最後に言明しておくべきかもしれない。筆者が意図したのは、このモデルを用いることによりわかりゆく神納の現在を映し出した一層鮮明な断面図を描くことにあったといえるからだ。

尚、本稿の資料は袖ヶ浦町民俗文化財調査（倉石忠彦氏代表）のおりに得たものである。また、執筆にあたり、袖ヶ浦町の多田憲美氏と谷口貢氏から合寺に関する資料やご助言をいただいた。記して謝意を表したい。

## 注

- 1) 1987年1月と7月に千葉県君津郡袖ヶ浦町神納（かんのう）で調査した。
- 2) 村人の動きは、ごく自然かつ敏速なものであったため、席についてしばらくの間、筆者は二つの輪の存在に気づかなかった。また、後日、場所を改めハアトリの話を聞いた時も、話者の側から二つの輪について話すということにはなかった。
- 3) 坂本 1984:293
- 4) 倉石忠彦 1987:概観 『昭和地区の民俗』
- 5) 佐藤清美 1987:村制 同書
- 6) 坂本 1984:292
- 7) 竹田 1984:30
- 8) 堀 1971:193
- 9) 葬式念仏は、出棺時、埋葬時、野辺送りの帰着後に唱える所もあるが、利根川上流地区のアト念仏のように、出棺後、祭壇を簡略化した後に行う場合もある。[坂本 1984:293]
- 10) 中辻子台、中辻子については、話を聞く機会に恵まれなかった。
- 11) この独立性が、筆者の参加により一時的に崩れたことについては、冒頭で述べた。今後は、参与観察における観察者の位置付けについて一層、検討していかなければならないと考えている。
- 12) まだ、死者を送り出していない分家や新宅は、ここからはずされる。

- 13) 中辻子台は、その頃は寺へは来ていなかった。小字内でハアトリをしていたか否かについては未確認。
- 14) 坂本 1984:293
- 15) 民俗念仏の呪術的性格については、念仏和讃の分析をするのが常套手段のようであるが、この調査地においてはそれに関する有効な資料が得られなかった。

#### 参考文献（五十音順）

- 五来 重 1957 「民俗的念仏の系譜」 『印度学仏教学』5-2  
1977 「墓と供養」 『東方界』39
- 坂本 要 1979 「六座念仏の講と行事」 『社会人類学年報』5  
1984 「祖先供養と葬式念仏」 『葬式墓制研究集成  
第3巻』竹田聰洲 編 名著出版
- 桜井徳太郎 1976 『講集團の成立過程』 吉川弘文館
- 袖ヶ浦町教育委員会・袖ヶ浦町民俗文化財調査会  
1987 『昭和地区の民俗 —袖ヶ浦町民俗文化財報告  
書1』
- 竹田聰洲 1984 「祖先供養の問題視覚」 『葬式墓制研究集成  
第3巻』 名著出版
- 堀 一郎 1971 『日本のシャーマニズム』講談社現代新書